

1.ペルソナ展

九州派の機関誌「九州派」第1号によると、最終ページの「グループの歩み」の冒頭に次の様なペルソナ展の記録がある。

昭和31年11月2日より4日まで、福岡県庁西側大通り壁面に、絵画は、石橋泰幸100号3点、黒木耀治100号3点、越智靖100号2点、150号1点、80号1点、桜井孝身百130号6点、詩の方は、天野啓三、原田種夫、板橋謙吉、川口敦美、俣野衛、織坂幸治、各務章、鈴木召平、高松文樹、田中巖の各氏の作品が展示されたとなっている。当時、二科展に出品していた画家4名と福岡市在住の詩人10名である。

このペルソナ展は、翌年結成の九州派の前史に属するものであり、九州派誕生の母胎の一つを成し、美術集団としての九州派の特異な性格の予兆を示すものである。

ペルソナ展より先、1954年5月、板橋謙吉氏によって、詩誌「詩科」（那須博氏の命名によるものと御本人から聞いている）が創刊されたが、創刊号の表紙は黒木耀治氏が描いている。（その後、表紙は寺田健一郎氏と二人で担当された）1983年3月刊行された、板橋謙吉遺稿詩集「砂の中の全て」の別冊「板橋謙吉の人と作品」所載の黒木程治氏の一文によると、ペルソナ展開催について「絵と詩の合同創作展の発想が持ちあがり、詩人側は板橋氏、画家の方は私が纏め役となり、ペルソナ街頭展と銘打って県庁通りで一大セレモニーを展開し、各紙を賑わした」と述べられている。

今、板橋氏は既に亡く、ペルソナ属の発想、命名と発表場所を県庁西通り壁面を選ばれた経緯を聞きただす術はないが、推測するに、街頭詩画展のアイデアと展示場所については、当時、板橋氏が県の鉱害課長（板橋氏令息旺爾氏を通じ、板橋夫人へ確認）だったことがその理由ではなかろうか。当時、板橋氏と共に詩人の方の取り纏めに奔走された織坂幸治氏より各務章氏へ尋ねて貰った話では、壁画使用の交渉には、同氏自身が行かれたということであった。

ペルソナ展の命名は誰方の命名によるものか、御教示いただければ有難い。

ペルソナ展出品の詩人10名の中に、「九州文学」の創始者原田種夫氏の名が見えるので、破天荒にも思われる街頭展へ良く出品されたものと、筆者は奇異の感を抱いたので確認の意味で那須博氏から尋ねていただいた所、出品した作品の記憶はないが、俣野衛氏から出品の誘いを受けたことは覚えているとの御返事であった。このことで、俣野氏へ電話で伺った所、自分にははっきりした記憶はないが、記録がそうになっているならば、間違いはない筈とのことであった。

那須氏によれば、原田氏の詩には、もともと強靱な批評精神があるので、街頭展という前衛的な試みにも賛同し、出品されたのは理由のないことではないかということである。

ペルソナ展出品画家の内、桜井氏は当時、詩も書いており、九州派結成の際、会員となった、小幡英資氏と共に「詩科」の同人であり、同誌に作品を発表していた。

この様に、既にその結成以前から、九州派と地元の詩人方との人間的結びつきは密接であり、それは九州派無き今日もなお続いていると言えようが、一方、両者の作品についての関係はどうであったかを考えると、異論もあろうが、詩と絵画という非常に近いジャンルでありながら、お互いに領域を守って、両者共に作品の中に踏み込む様なことはなく、人間関係では親密ながら、作品の上では平行した関係にあったと言えよう。

そのことは、俣野氏が九州派の会員として参加され、運管と画作によって積極的に活動されて、運動の大きな原動力であったことと他の2,3の例外を除けば、九州派終熄以後も今日まで変わっていない様である。例えば、両者の協力関係も詩集や詩誌の装丁位で、本格的な詩画集の制作とか、詩人の側からの画家の作品論、作家論等は皆無であったと言えるのではなかろうか。